

## 2010年に全学改組,新たな総合大学に

明星大学 学長

小川 哲生



おがわ・てつお氏

1946年 東京都生まれ  
早稲田大学大学院文学研究科修了後、  
明星大学人文学部専任講師、助教授を経て  
1986年 明星大学人文学部教授  
1992年 ミシシッピ州立大学名誉教授(生涯教育)  
1998年 明星大学人文学部 学部長  
2002年 明星大学副学長  
2008年度より第7代学長  
専門は教育学

本学は、母体である明星学苑が創立してちょうど40年目、1964年（昭和39年）に開学いたしました。スタートは理工学部です。明星大学といえば文科系の教育・研究をイメージする方が多いようですが、本学の発祥は理工系だったのです。それには時代背景もありました。驚異的な経済成長の途上にあって、「ものづくり」が国の屋台骨とされ、良質な技術者養成が何より求められた時代でした。そうした国家的要請と本学開学のタイミングが一致したのです。翌1965年には人文学部開設、67年には通信教育部開設と、今に続く本学の礎は開学後すぐにかたちづけられました。

明星学苑はそもそも大学開学以前から、幼稚園～高等学校にいたる初等・中等教育の質の高さで、東京・多摩地区にて名を馳せてまいりました。本学創設者の兄玉九十先生は二宮尊徳翁を敬愛し、陽明学を学んで自らの思想を確立しました。結果、空理空論を嫌い、体と頭を動かして学ぶことの重要性に気づき、それが本学苑伝統の「体験教育」として結実しました。今でこそ体験教育を謳う教育機関は多々ありますが、昭和初期に『体験教育』という学内報を発行していた本学苑こそが元祖であろうと私たちは考えています。

その伝統は現在も本学のなかで、全学部1学年必修科目の「自立と体験」となって息づいています。たとえば経営学科では、入学早々の4月に5～7人程度のチームに分かれ、一人1000円程度を供出して「会社」をつくります。実際に商品を開発・製造し、千葉県のマザー牧場などで販売するといった経営シミュレーションを「自立と体験」のなかで行います。こうした体験を通じて「建学の精神」を学び、社会の現実を知り、自立への第一歩を踏み出してもらおうと考えているのです。

### 拡大路線から原点回帰へ

来る2010年には全学規模のリニューアルを計画し

ており、本学にとって大きな節目の年となるでしょう。

まず、教育学部を新設する予定です。具体的には現在の人文学部心理・教育学科の「教育学専修」を教育学部教育学科に、「心理学専修」を人文学部心理学科に分離・分割します。新設される教育学部には中学校・高等学校の主要科目の教員免許状が取得できるカリキュラムが加わり、これまでの幼稚園・小学校・特別支援学校、また保育士の育成と合わせ、「教育の明星」にふさわしい学部体制が整うこととなります。

また、人文学部は新たに日本文化学科、福祉実践学科、心理学科を加えた5学科体制となり、学びのフィールドがいっそう広がります。とりわけ福祉のマネジメント人材やスペシャリストを養成する福祉実践学科は多摩地区のニーズと合致しているため、今後大きくこの地に貢献していけるでしょう。

さらには理工学部の6学科体制を、1学科6学系体制に変更します。ご承知のように、変化の波に激しくさらされる技術者の世界では、特定の技術の習得よりも、理工系の基礎を幅広く習得し、現場で柔軟に対応できる人材が求められるようになっていきます。それに応えるために学科の壁を取り除き、どの学系の学生も参加できるような体験型プロジェクトを数多く設置する体制にしていく予定です。

以上のような今回の改革の計画は、20年ほど前から漠然とですがありました。第2次ベビーブームの勢いに乗り、多くの大学が拡大路線に転じたその当時、本学も同様の路線を歩みました。一時的に膨大な受験者が集まりましたが、すぐにピークを過ぎ、その後大きく減少。本学の減り方も、想像を超えたものでした。

私からすれば、身の丈に合わぬ拡大がゆくゆく内部にダメージをもたらすことは、当初から自明でした。ゆえに原点回帰を主張し続けましたが、それがようやく具体化し始めたのは私が人文学部長となった10年ほど前からです。その後、副学長を経て学長となり、

やっと現実化することになったというわけです。

### 教職員が対等に議論するプロジェクト

むしろ2010年をもって改革が終わるわけではありませぬ。今後も「明星大学にしかできない教育」を追い求めていきますが、たやすくはないことは承知しています。全教職員が一丸となり、頭をつき合わせ、本気でアイデアを搾り出していくことが必要でしょう。

その一環として「MI21プロジェクト」なるものを立ち上げました（Mは明星大学、Iはイノベーション）。教育的質を高めるための戦略的な経営を実現するために各業務を数値目標化し、バランス・スコアカードを用いて点検評価することを全学的に推進するプロジェクトです。学科ごとにチームをつくって活動していますが、そこには教員と職員がほぼ半数ずつ入っています。教職員が共同で学科のスコアカードをつくり、運用しているのです。教員と職員が対等の立場で大学運営に携わること、できれば職員がリードしていくことが理想的だと私は考えていますが、その理想に少しずつ近づいている実感があります。最近もある学科の教職員がスコアカードづくりのために泊り込みの研修を行い、夜中まで議論したり愚痴を言い合ったり、お互いの距離がだいぶ縮まったと聞きました。トップダウンではなく、現場がこのように活性化していくならば、今後も十分期待が持てると思っています。

自分のこれまでを振り返っても言えることですが、学校生活はその人の人生のなかで、決して消すことのできない重要なパートを占めるものだと思います。卒業生が終生変わらぬ誇りを持ち続けられる母校であり続けること。あの学校での思い出は自分の財産だと思ってもらえるような学校であり続けること。当たり前のような学校づくりをめざさなければいけないと、あらためて心する次第です。■